



Book Review 戦後日本の「ねじれ」に向き合う[戦後入門 加藤典洋・著 村上春樹は、むずかしい 加藤典洋・著]

梶谷, 懐

(Citation)

外交, 35:140-143

(Issue Date)

2016-01

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

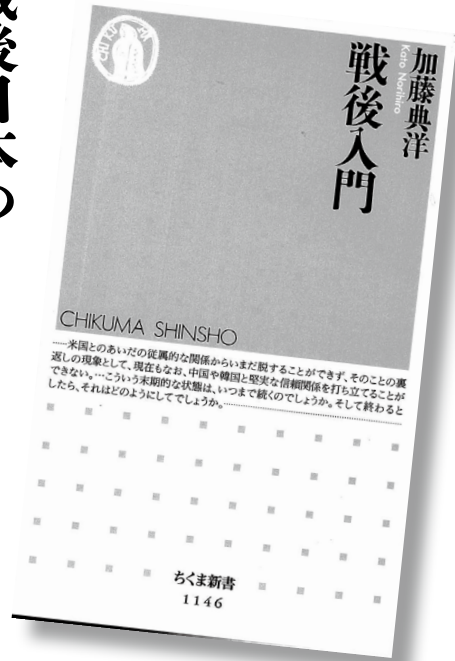
<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003912>



【選評】

神戸大学大学院教授

梶谷 懐



戦後日本の 「ねじれ」に向き合う

戦後入門
加藤典洋・著

ちくま新書／2015年／1400円＋税

二〇一五年一〇月国会で承認された安全保障関連法について、国内での議論が沸騰し、国会前のデモなどの直接行動も行われたことは記憶に新しい。そのなかで、アメリカや中

国といった日本の将来に大きな影響を与える超大国との関係見直しを含め、今後の「国のかたち」を改めて論じる書物が数多く出版された。著名な文芸評論家の加藤典洋による『戦

後入門』も、そうした書物のうちの一つである。

加藤は過去の著作のなかで、戦後日本社会が抱え込んだねじれ、およびその象徴としての「アメリカの影」にこだわった言論活動を行ってきた。

ここでいう戦後社会のねじれとはどういうことか。まず前提となるのは、民主的かつ平和主義に彩られた、戦後の「よき社会」を支えてきた「よき憲法」が、じつはGHQという超法規的な権力によって、戦前の日本社会から切り離された形でもたらされたという事実認識である。ここから「対米従属」から抜け出ようとする、それ自体は正当な試みが、常に戦前社会への回帰をイメージさせ、むしろ国内からの強い反発を生むという「ねじれ」た現象が生じることになる。この「ねじれ」はあまりに深刻で日本人のアイデンティティを揺るが

すものなので、その「ねじれ」自体が日本人やその言論活動の中に内面化され、見えにくくなっているが、しばしば「影」のようなものとして姿を現す。これが加藤の一貫した問題意識だといつてよい。

脱従属としての「左折の改憲」

その「ねじれ」をもたらししたのは、加藤によれば「米英二国によってシナリオを書かれた戦争」としての第二次世界大戦である。枢軸国側にとって第二次世界大戦とは、「もてる国」の既成の秩序に「もたざる国」が新秩序建設計を指して挑戦する、従来型の帝国主義戦争に過ぎなかった。それが、自由主義・民主主義対ファシズム・全体主義という価値観の対立を反映した「世界戦争」だという理解が広まっていたのは、戦争の勝者である米英が、この戦争を「正しいイデオロギー

が誤ったイデオロギーを成敗した」という物語に成形しなおす必要を感じ、そうしたからである。

米英、なかんずくアメリカがそのような「戦争の性格の改変」を行うにあたって重要な役割を果たしたのが、広島・長崎における原子爆弾の投下だ、と加藤は指摘する。多くの民間人を殺傷し、後々にまで放射線による被害を与えた原爆投下について、米国内でもそれが「不正義」ではないかという強い批判が巻き起こった。自分たちは勝利したものの、不正義を行ったのではないか。そうした「不安」を糊塗するために、「正しいイデオロギーが誤ったイデオロギーを成敗した」という物語が要請された——いわば戦後史の語られざる核心部分に、加藤は迫力のある筆致で迫っていく。

このような第二次世界大戦の歴史認識に起因する「ねじれ」は、その後の

日本社会における進歩派と保守派の対立にも影を落とす。すなわち、進歩派はアメリカによってもたらされた平和憲法を「よきもの」として尊重しながら、基地問題などで難題を押し付ける米国への反発を前面に出す。一方の保守派は押し付け憲法からの脱却を唱えながら、安全保障面では対米依存の姿勢を貫く、というねじれがずっと続いていた。

このため日本は、戦後七〇年の現在でも米国との従属的な関係から抜け出せず、その帰結として中国や韓国と堅実な信頼関係を打ち立てることができないでいる。このような状況を打破するために加藤は、憲法九条に在日米軍基地の撤去や非核条項を盛り込み、現在の自衛隊を国連の指揮下にある国連待機軍と、国土の防衛と国際災害救助にあたる国土防衛隊に再編するといふ、国連主義に基づいた「左折の改憲」

を主張している。

「仮構された事実」のリアリティ

以上のような本書の議論には一定の説得力があると思う。ただ、評者が違和感を感じたのは、著者が「中国や韓国と堅実な信頼関係を打ち立てる」ことの重要性を認識しながら、それを阻んできた最大の理由を対米従属に求めている点だ。

評者に言わせればこれは因果関係が逆である。つまり、どのようにして中国・韓国と堅実な信頼関係を築くか、という具体的な構想がないままでは、対米従属の解消によって問題の解決を図ることはできないのではないか。日本（人）が戦後の民主的な価値観を保持したまま、人権や民主主義といった普遍的な価値観に対し警戒感を強めつつある共産党政権を抱く中国（人）とどのような関

係を築けばいいのか、そのための道筋が現状ではほとんど見えてこないからである。

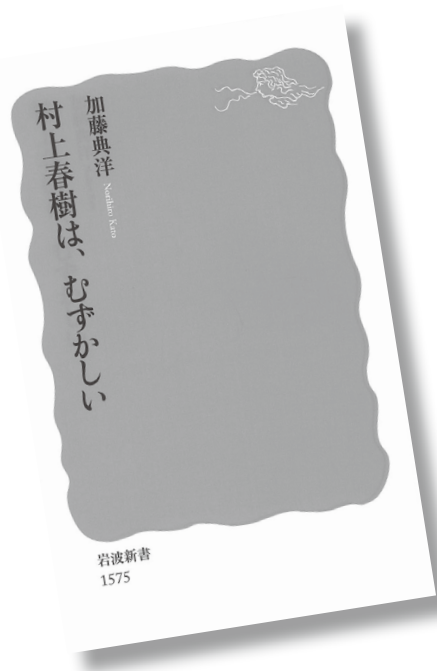
そうした違和感を抱いていたところに、同じ著者による『村上春樹は、むずかしい』が出た。本書は単に村上春樹の著作を解説した文芸批評にとどまらず、上述の「中国・韓国との信頼関係をいかにして築けばいいのか？」という疑問に対して、村上の作品をヒントに具体的な道筋を探ろうとした野心的な試みとしても読むことができる。

本書一三二ページにある記述、「近代日本批判の従来型の『否定性』を殺菌し、脱構築しながら、なおかつ、別種の新しい『否定性』を作り上げること、コミットすること」が、これからの日本（人）が中国・韓国（人）との「堅実な信頼関係」を築いていくにあたって必要な姿勢、というこ

とになるだろう。

ここでいわれている「新しい『否定性』とはどういうことか。これまで、戦後の進歩派によって示されてきた中国・韓国に対する贖罪意識は、日本が明治以来推し進めてきた「近代化」およびその暴力的な帰結への「否定性」によって支えられてきた。しかし、そのような近代日本に対する一方的な「否定性」に支えられた思考は、左翼思想が退潮した現在、大きな力を持ちえない。

それに対して村上は、例えば「ねじまき鳥クロニクル」において、ノモンハン事件における日本人将校への皮剥ぎシーンや、新京の動物園における猛獣の殺処分など、戦争における残酷なシーンの、象徴的かつ神話的な描写——まさに「仮構された歴史的事実」の描写——を通じて、「逆に新しい現在の『記憶』された歴史



村上春樹は、むずかしい 加藤典洋・著

岩波新書／2015年／800円＋税

の『生々しい』現実性に迫っている」。ここにこそ新しい「否定性」構築へのヒントがある、というわけだ。

このような、歴史の仮構性に支えられた新しい「否定性」の構築は、現在歴史認識の共有で日本と軋轢を抱える中国・韓国との関係構築にもつながる可能性をもつ。それは、『ほどなく、こうした間接的な方法を駆使しなければもはや歴史の現実性に

迫れない』という時代が、韓国にも、中国にも、到来するはずだからである」（同書一四四ページ）。

イノセントな中国像を超えて

実は村上の小説には、「羊」三部作に登場する「ジェイズ・バー」のマスター「ジェイ」を始めとして、中国人がかなり頻繁に登場する。それらの中国人の描写にあたって村上は慎重に

ステレオタイプを避け、信頼関係を結ぶべき他者としての中国（人）へのオマージュを投入しているといつてよい。

ただ、それはあくまでも本来あるべき、理想化された中国（人）の姿でもある。議論の前提となる中国という他者のイメージが、あまりにイノセントで「空白」に近いものになっていることは、むしろ現在の両国の間に横たわる現実の問題を解決することの妨げにならないか。本書が唱える日中韓における新しい「否定性」へのコミットメントのためには、戦後の進歩派に共有されてきたイノセントな他者像をあえて崩し、そこらどこに着地するか、という課題を追求する必要があるのではないか。評者は、以上のような観点からこの二つの書物による問題提起を「引き受け」ていきたいと考えている。●